

## 3月1日 四旬節第1主日

創 9:8～15    1ペト 3:18～22    マコ 1:12～15

### 1. マコ

v.15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」

“神の国”とは、神の支配あるいは神が王であることを意味していて、決して地図上のある国のことではありません。新約聖書が語っている神の国という用語には、永い歴史的背景があるのですが、直接にはユダヤ教におけるメシア信仰とその黙示文学が関係しています。それは神が御自分の民を救い、これに敵対する民を裁かれる世の終わりの時、すなわち主の日の到来を待望する信仰であって、ルカ 2:25 に「イスラエルの慰められるのを待ち望み」と書かれているものです(ルカ 1:54-55,68-70, 2:38 参照)。

洗礼者ヨハネが「エリヤの霊と力で主に先立って」(ルカ 1:17)現れ、差し迫った神の怒りを語った時、ユダヤ全土から多くの人々が彼のもとに来て、罪を告白し、洗礼を受けました。ヨハネは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と叫びました。主の日は異邦人に対してだけではなく、ユダヤ人とその宗教的指導者にとっての裁きの日であるという、古くからの預言者たちの主張が再び語られたのです(マタ 3:5-12)。

ヨハネが捕らえられた後(v.14)、イエスはその同じ言葉で自ら語り始めます。イエスにとってヨハネの登場は時が満ちたしるしであり(マタ 11:13)、イエスの公生涯は神の国の到来を告げ知らせるものであったと、福音書は述べています(ルカ 16:16)。

「神の国は近づいた」ということ、それ故に「悔い改めて福音を信じなさい」という聖書の使信を、代々の教会は聞き続けて来ました。イエスの宣教と奇跡は、今や神の支配が開始されたこととしるしでありました(マタ 12:28)。しかし、それが最終的に「力にあふれて現れる」(マタ 9:1)のは、なお将来なのです。

この、「神の国が力にあふれて現れる」ために、イエスは自分が僕なるメシアとして苦難を受けねばならないことを、繰り返し弟子たちに語られました(8:31, 9:31, 10:33-34)。確かにキリストは十字架につけられて死に、葬られ、復活して“死に打ち勝ち、信じる者に神の国を開かれた”(典礼聖歌 367:7)のです。

福音を信じるということは、私たちにとっての現在の課題であり、日ごとに新しい神からの呼びかけなのです。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる」(ロマ 10:9)と書かれている通りです。

### 2. 1ペト

v.21 「この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。」

ニケア・コンスタンチノーブル信条が宣言している“罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め”という信仰が、私たちのものの考え方や日常生活の中に再び回復されねばなりません。いったいいつ頃から私たち

の教会は、罪と死からの救いという福音のいちばん中心的な主題を語らなくなってしまったのでしょうか。

この1ペトのテキストは、古代教会の洗礼式の式文から引用されたものですが、そのような教会の伝承を深く学ぶことに、これまで私たちはあまりにも怠慢だったのではないのでしょうか。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ4:25)「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」(エフェ1:7)「神はキリストによって世を御自分に和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたち(すべてのキリスト者!)に委ねられたのです。」(IIコリ5:19)

私たちキリスト者の本国は天にあります(フィリ3:20)。悔い改めて福音を信じることなしには、キリストの再臨の希望、神の国を受け継ぐ希望について弁明する(1ペト3:15)ことは、決して出来ません。洗礼志願者への入信のための教育とは、そういうものであることを、すでに洗礼を受けた私たち信者はこの四旬節に再認識したいものです。

### 3. 創

くちばしにオリーブの葉をくわえた鳩(8:11)や、ノアの契約のしるしである虹(vv.12以下)が、平和の象徴として用いられて来たことは、だれもが知っています。しかし、8:21の言葉を記憶している人は、多くありません。「主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。“人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。”」

誤解してならないのは、神は今後洪水や自然災害の一切ない世界にするといわれたのではなくて、ただ“ことごとく滅ぼす”(v.11)ことをしないとだけ言われただけだということです。洪水物語りは、12章から始まる神の救済史の序曲として位置づけられているのです。旧約聖書の歴史は、イエス・キリストの血によって立てられる新しい契約(Iコリ11:25)を、ひたすら目指す救済史でありました。

イエスは、十字架の死という洗礼(マコ10:38,45、ルカ12:50)を受けねばなりません。イエスがヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられたその日から、苦難の僕なるメシアとしての歩みが始まりました。そして今は、「罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠の神の右の座に着き」(ヘブ10:12)、私たちのミサを通して「悔い改めて福音を信じなさい」と語り続けておられます。私たちは説教で、聖書に書かれた昔話を聞くではありません。「神の言葉は生きており」(ヘブ4:12)、「主は生きておられる」(王上17:1)。

アーメン。

## 3月8日 四旬節第2主日

創 22:1～18    ロマ 8:31～34    マコ 9:2～10

### 1. マコ

毎年、四旬節第2主日には、共観福音書の中からの“主の変容”のテキストが朗読されます。ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人が、口にするのも恐れおおい光景の中でイエスがメシアであることを確信し、その御顔に輝くメシアの将来の栄光(II コリ 4:6)をかいま見たという、非常に神学的な意味合いの濃い記述に耳を傾けるのです。

人はこのテキストを、まるで意味不明な現場レポートでも聞くように読んでではありません。なぜならこのテキストは、福音書の中で、単純な目撃者による報告をはるかに超えるものとして語られているからです。

先ずここに描かれているイエスは、“モーセのような預言者”(申 18:15,18)として、出エジプトに勝る大いなる贖いを成し遂げるメシアであり、その新しいモーセが、かつてのモーセのように聖なる山で神の声を聞いたのです(II ペト 1:18)。出 24:16には、こう記されています。「主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。」そのとおりに「六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」(v.2)のです。変容の山は、もちろん、新しいシナイであり、神は七日目に雲の中から新しいモーセに呼びかけられました(v.7)。モーセが山を下ったとき、神と語ったために、彼の顔の肌が光を放っていたように(出 34:29)、弟子たちはイエスの御顔に輝く神の栄光を見ました。ペトロが「仮小屋を三つ建てましょう」(v.5)と言ったのも、おそらく「神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる」(黙 21:3)終末の象徴であるように思われます。

モーセは真の預言者であり(申 34:10)、エリヤは マラ 3:22-23 以降、第二のモーセと考えられていました。そのエリヤとモーセは、物語りの中で古い時代を象徴し、預言の成就する新しい時代(II ペト 1:19)と対比されています。雲の中からの声が「これはわたしの愛する子、これに聞け」と呼びかけた後、彼らの姿は消えて、弟子たちは「もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた」(v.8)と、書かれています。

しかし、まだ時は来ていませんでした(ヨハ 2:4)。「ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった」(v.6)、つまり彼はこれから、キリストが「多くの人の身代金として自分の命を献げ」(マコ 10:45)ねばならないということ、を、学ばなければなりません。

主の変容の物語りは、使徒たちが主の復活後に宣教した福音を私たちが信じるならば、現代の私たちも彼らと同じように、「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る」(II コリ 4:6)ことが出来るということ、を、伝えているのです。

### 2. ロマ

v.32 「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜みまず死に渡された ……」

“身代金”(マコ 10:45)という用語は元来は、奴隷をその持ち主から買い取って自由の身にするための代金を意味していたのですが、主イエスは御自分の使命を イザ 53 章 の“僕なるメシア”として理解し、この用語を用いて イザ 53:10-12 に言及されたのでした(マコ 10:45)。そこには、神が御自分の僕を“償いの献げ物”とされ、主の僕は“多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った”と書かれていました。

明らかに、ここでは贖いは神の終末的な救いを意味していて、もはや代金の支払いという元来の意味が失われています。神がその民を解放されるという意味での贖いの典型が、出エジプトという歴史上の事件であり、ユダヤ人は、来るべきメシアは「イスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。」(ルカ 24:21)

新約聖書、中でも特に使徒パウロは、この贖いの概念をキリストの終末的な救いに結びつけて語っています。神はキリストの死を通して御自分の民を買い取られたのです(使 20:28、テト 2:14、エフェ 1:7、I コリ 6:20、7:23)。しかし、その贖いが完成するのは、主の再臨の日です。今の世にあっては、キリスト者は約束された聖霊で証印を押されていて(洗礼の秘蹟で)、この聖霊が終末的な贖いを保証しているのです(エフェ 1:13-14)。そうです！「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださいなのです。」

### 3. 創

v.8 「焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」

ヨハネ福音書は、贖いという用語を使いませんでした。それに代えてイエスを、「世の罪を取り除く神の小羊」と呼びました。アブラハムが“自分の独り子である息子を、ささげることを惜しまなかった”(v.12)のは、「独り子である神」(ヨハ 1:13, 3:16)の予型であったと説明しているのです。ロマ 8:32 で「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜みませんに死に渡された」と語ったときの使徒パウロも、同じことを考えていたのでしょう。

四旬節は、私たちが不信仰という心の覆いを取り除くとき、神が私たちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださるときです(II コリ 3:14-18,4:6)。神に感謝。

アーメン。

## 3月15日 四旬節第3主日

出 20:1～17    Iコリ 1:22～25    ヨハ 2:13～25

### 1. ヨハ

vv.21-22 「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。」

エルサレムの神殿に対する、異常とも見えるようなイエスの暴力的介入が実行されたとき、ユダヤ人たちはイエスに向かって、“何の権威で、このようなことをするのか”(マコ 11:28)を証明するしるしを求めました(v.18)。そして、ユダヤ人たちはイエスの答を見当外れにしか理解せず、弟子たちはイエスの復活の後になって、初めて正しくイエスの言葉を理解したのでした。

この出来事は、共観福音書ではイエスの生涯における最後の過越祭に位置づけられていますが、ヨハネ福音書はこれを最初の過越祭での事件のように書いています。恐らくそれは、著者の神学的意図によるのであって、私たちは特にその点に注目しなければなりません。

ヨハネ福音書の神学によると、この事件の核心はエルサレム神殿の刷新ないし改革ではなくて、そうではなくて、十字架につけて殺され、復活したイエスの体が、この神殿に取って代わることの予告であったということです。教会こそが復活されたキリストの体であり、今やユダヤ教とその神殿に代わる時代が来たという神学(4:21-23)が、前面に打ち出されているのです。私たちは福音書を、このような神学を前提にして読むことの大切さを知らなければなりません。

Iペト 2:4-10 は、キリストは“隅の親石”(イザ 28:16、詩 118:22)であり、キリスト者も生きた石として用いられて“霊的な家に造り上げられ、イエス・キリストを通して神に喜ばれる霊的ないけにえを献げる祭司となる”と述べています。かつては神の民でなかった者が、今は神の民となって造り上げられる“霊的な家”という概念に注目しましょう。

まさにイエスが言われたのは、そのことであつたと、ヨハネ福音書は言おうとしたのです。ヨハネ福音書は、御子の復活こそが“今の時代の者たち”に与えられる唯一の決定的な“しるし”である(マタ 12:39、ルカ 11:29)ことを、現代の私たちにも思い起こさせてくれます。

### 2. Iコリ

“十字架につけられたキリストを宣べ伝える”(v.23)ということの重大さを再発見することによって、歴史の教会は繰り返し改革され、刷新されて来ました。カトリック教会にとっては、第二バチカン公会議がもたらした典礼刷新の意義は、計り知れないほど大きいと言わなければなりません。

それ以来、すべてのミサで司祭は、必ず聖書に基づく説教をすることが求められるようになりました。また信徒には自ら聖書をひもとして学ぶことが奨励されるようになりました。神の啓示に関する教義憲章

(21)は、「それ故に、教会の教えも、キリスト信者の信仰そのものも、聖書によって養われ、規定される」と述べています。同 22 の実りとして、我が国でも新共同訳聖書が 1987 年に出版されました。

しかし、それ以来 40 年を過ぎた現在の我が国のカトリック教会では、“神の力である十字架の言葉”(I コリ 1:18)が司祭の説教の、また信徒たちの信仰理解の中心主題となっていると言えるでしょうか。“この御子において、その血によって贖われ、罪を赦された”(エフェ 1:7)という福音が、“信じる者すべてに救いをもたらし神の力”(ロマ 1:16)として生き活きと宣べ伝えられ、また信じられているでしょうか。

「あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です」という使徒パウロの言葉(ガラ 4:11)が、聞こえてくるようではありませんか。

### 3. 出

w.2-3 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」

神の民イスラエルとは、このような民であることを、私たちは聖書から学ぶのです。この前提を理解しないで、聖書からただ戒めと教えを学ぶだけの人は、残念ながら救いにも信仰にも全く無縁なのです(イザ 29:13)。中世後期以降、多くのカテキズムがその中で十戒を取り上げるようになりました。日本語にも翻訳されて読まれている 1997 版「カトリック教会のカテキズム」も、その例に倣っています。

私たちは、聖書やカテキズムを学ぶ前提というものを、明確に理解しなければなりません。「大切なのは、新しく創造されることです。」(ガラ 6:15、ヨハ 3:5-6 参照) 聖書の著者だけではなく、読者である私たちも、今こそ、「イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決め」(I コリ 2:2)ようではありませんか。 アーメン。

## 3月22日 四旬節第4主日

歴下 36:14～23 エフェ 2:4～10 ヨハ 3:14～21

### 1. ヨハ

v.18-19 「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」

肉となってこの世に宿られた“神のことば”(1:14)なるキリストは、死者の中から復活して天に昇り、栄光を受けられました。しかし、それは主とその栄光がこの世を去ったということではありませんでした。今やキリストは弁護者なる聖霊として戻ってこられ(14:18)、信じる人々と一緒に住んでくださる(14:23)。キリストは宣教する教会の“福音のことば”として、共におられます。

ですから「光が世に来た」とは、歴史の教会にとって常に現在の事柄であって、従ってキリストの福音を信じているか否かにより、“神のことば”の剣によって裁かれるということも(黙 19:11-16)、すでに現在の事柄なのです。主イエスが不法の者たちを御自分の口から吐く息で殺すという表現が、再臨の日の裁きとして描かれていますが(IIテサ 2:8)、その起源は イザ 11:4 にあり、それが 黙 1:16, 2:12, 16, 19:15, 21 では“神のことばの剣”になっているのです。

神のことばなるキリストが、救いであると同時に裁きでもあるという、ヨハネ福音書および黙示録の語るメッセージを深く聞くことが、現代の教会に求められています。

v.14 「そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

この人の子が上げられるという言葉で、ヨハネはキリストの福音を表現しました。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:25) 「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」(ロマ 8:34) この十字架の福音を、教会は聖伝と聖書によって、現代に至るまで守り受け継いで来ました。それはすべての人に対して公にされていて、“聞く耳のある者”(マコ 4:9)は聞くことができます。

ですからカトリック教会では神の啓示に関する教義憲章が、「教会の教えも、キリスト信者の信仰そのものも、聖書によって養われ、規定される」(21)、「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」(25)と明確に宣言しています。

### 2. エフェ

v.10 「なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い

業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」

新約聖書は、キリスト者の救いを「新たに生まれる」(ヨハ3:3)ことであると強調しています。キリスト者は「神に造られたもの」であって、決して自分で変身したり成長して信者になったものではありません(ロマ6:3-11、IIコリ5:17)。神は最初の人アダムを、御自分の創造の御業として造られました。そのように今、神はキリストの贖いの御業によって私たち神の民を造られたのです。

キリスト者の救いが自らの力や善い行いによるのではないように(vv.8-9)、今やキリスト者の善い業は、単なる人間の善意や意志から生じるものではなくて、「神が前もって準備してくださった」、福音に基づく新しい生き方なのです。

福音を知らなくても、人は善人や世の功労者になることが可能です。しかし、キリストの福音を聞き、信じることなしには(ロマ10:9-17)、人が救われることはあり得ないのです。

### 3. 歴下

v.16 「それゆえ、ついにその民に向かって主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなった。」

もしこの記録を私たちが他人事のように読むなら、いったい私たちの救いに何の益があるでしょうか。マタ23:29-32によれば、律法学者たちとファリサイ派の人々は、先祖たちは罪深かったが、自分たちはそうではないと考えていました。実際、キリスト信者の多くも同様に考えているのではないのでしょうか。

キリストがその血によって贖ってくださった私たちのあるがままの姿、すなわち「生まれながら神の怒りを受けるべき者でした」(エフェ2:3)という厳粛な事実を、この歴下の記録から読み取ることが出来ますように。「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エフェ2:8) 「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。」(ガラ6:16)                      アーメン。



## 3月29日 四旬節第5主日

エレ 31:31~34 ヘブ 5:7~9 ヨハ 12:20~33

### 1. ヨハ

v.23 「人の子が栄光を受けるときが来た。」

「栄光」という言葉が、新約聖書ではイエス・キリストと結びついて、特に終末論的意味合いで用いられているということに注目しましょう。受肉されたキリストは、その受難と死を経て、栄光に入るべきことを(ルカ 24:26)、早くから弟子たちに語っておられました(マコ 8:31, 9:12, 10:32-45)。

福音書を読む人はだれでも、受難物語りがイエスの姿を、悲惨で哀れな犠牲者ないし殉教者としてではなく、そうではなくて、勝利へと向かって進んで行く神の子・救い主として描いていることを、強く印象づけられます。特にヨハネ福音書は、イエスの十字架の時が「栄光を受ける時」であることを強調しています。

しかし、人は信仰を与えられて初めて、「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る」(II コリ 4:6)ことが出来ます。異邦人がユダヤ人と共に福音に与る者となるのは、主の十字架と復活の後でした。vv.20-21 にギリシア人が登場するのは、その時が今や迫っているということの象徴でありました。

v.31 「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。」

神の怒りは、神が正しい裁きを行われる終わりの日に、最終的に現れるのですが(ロマ 2:5)、今や主イエスはその受難と死によって御自身がその裁き主となる決定的な時を迎えておられました(使 10:42, II テモ 4:1)。教会の時は、すでに決定的に、「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている」(3:18)時となったのです。

ですから、主の受難と死が、私たちキリスト者にとっては決して単なる過ぎ去った昔の出来事ではあり得ないように(ガラ 3:1, ロマ 8:34)、神の裁きも、キリストによる救いも、現在の事実であり、また将来の希望なのです(ロマ 5:1-2, 8:11, I テサ 5:9)。

### 2. ヘブ

主の受難の物語りににおける中心的な主題は、父なる神への御子キリストの全き従順ということでした。ヨハネ福音書は「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」(ヨハ 12:27)というイエスの言葉を、共観福音書は「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マコ 14:36)というイエスの祈りを残しています。

私たちは“従順”という聖書の言葉を、ただの人間的な美德のようなものに還元してしまってはなりません。“父なる神への御子キリストの全き従順”というもののすさまじさの一端を、この vv.7-9 は見事に描いています。フィリ 2:8 の“十字架の死に至るまでの従順”という言葉と共に、それは私たちにとって四

旬節の黙想の第一の主題です。

それでは、私たちの御子への従順(v.9)とは何でしょうか。それは「わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力」(エフェ 1:18-21)を理解し(同 3:18)、感謝する(コロ 1:12)ことです。使徒パウロは、救われたすべての人に励ましの言葉を贈りました。「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(コロ 1:23)

私たちは“恵みにより、信仰によって救われた”罪人であって、ただ賛美と感謝だけがふさわしい(黙 5:12)。決して思い上がって、キリストの美德に倣って、自分もキリストのようになろうなどという不遜な考えに誘われてはならないのです。

### 3. エレ

このエレミヤ書のテキストの釈義の一例を、私たちは ヘブ 8章 で読むことができます。明らかに、エレミヤによる新しい契約の預言は新約聖書神学を貫く主題であって、使徒パウロが残した主の晩餐の制定のことばでは、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である」(Iコリ 11:25)と記されています。

ローマ・ミサ典礼書の奉献文では、その第一のエピクレーシスで“御子わたしたちの主イエス・キリストの御からだと御血になりますように”と祈ります。しかし、それと同時に私たちは、主イエスが間近に迫った御自分の死を、古きイスラエルに代わって御自分の教会との間に立てられる新しい契約の行為であると宣言されたことに、心を向けようではありませんか。

「こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです。」(ヘブ 9:15)

今年も教会は過越の祭儀に備えながら、会衆一同で声を合わせて歌います。「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」

アーメン。